



特集 ◇利用者のニーズを
考える
Report ◇学習会「今、市民
が願う図書館とは—
◇京都ライトハウス
に学ぶ図書館サービス
の可能性

特集 利用者のニーズを考える—図書館の蔵書コレクションを中心に

こうなれば、もっと図書館を利用します！

図書館を利用するとき必要と感ずること、欲しいと思うサービスと情報。このような利用者の「ニーズ」と現実の図書館が提供するサービスが一致すると、双方が満足でき、よりよい図書館になっていきます。ニーズには多くの人が必要と感ずているものから、気づかれにくいもの、他の例を見て初めて必要性がわかることなど様々あります。

今回はけやきメンバーが、「私が左京図書館や京都市図書館に必要と感ずていること」を蔵書コレクションに視線を注いで寄稿しました。図書館が大好きで、身近な図書館がよりよいものとなってほしい、いつもそう思いながらも、中にはこのところ、図書館に足が遠のく人もいます。それはどうして？ どうなれば、もっと行きたくなるのでしょうか。

利用者が自身の図書館の使い方を見つめつつ、図書館に対するニーズを考えてみました。

◇充たされない思いは

読んでみたいという気持があるにもかかわらず、自分にとってあまり馴染みではない作家の本は、買うのに二の足を踏むものだ。買って読み始めてはみたものの、あまり魅力を感じずに、途中で止めてしまったら本棚の場所ふさぎになってしまう。そういう時、図書館はありがたい存在だと思う。まず借りて読んでみて、「この作家の本は手元に置いておきたい」と思ったら買えばよい。でも、それはちょっと腰掛け的に利用する場としての存在意味しかない。

今、私は、左京図書館に出会った時のわくわくした気持はどこかへ行き、いまひとつ充たされないまま帰ってくる人が多い。そうこうしているうちに、だんだんと図書館から足が遠のいてしまった。

社会の出来事や自然現象などについて調べたいと思った時、頼りになるのは図書館だ。百科事典などで大まかに捉えることはできる。しかし、そこからさらに絞り込んでいくことも、一歩突っ込んだ内容の本が揃っていないように思う。社会科学系、自然科学系の本から、私達は実生活に関わりの深い知識を得ることができる。そして視野を広げ、多角的に物事を考える力を養っているのではないだろうか。

感性を刺激される喜びを得るための、小説やエッセイなどと同じように、「知りたい」という気持も充たしてくれる、準専門書的な本がもう少し揃ってしてくれたら、図書館へ足の向く回数も増えるのではないかと思う。(増井)

◇読みたい本に出会うために

時間のゆとりができた今、図書館が歩いて行けるところにあるというありがたさを実感しています。

以前は図書館の書架の前を行ったり来たりして本を選んでいたのですが、最近は読みたい本は、新聞の新刊の宣伝や読書のページの紹介文の中から見つけています。そして図書館のコンピューターですぐ借りられるか調べ、予約が必要なものは予約をして待ちます。読みたい本は複数あるので待つのは気になりません。先日、新聞で紹介されていた苫小牧市のように「自宅や勤務先からインターネットで貸出予約の出来るシステム」があるといいなあと思います。

雑誌は最新の情報を得ることが出来ます。雑誌の種類がもっと増えてもいいように思います。児童文学関係で言えば、「子どもの本棚」「子どもと読書」「こどもとしゃべり」「日本児童文学」「子どもの本」「クーヨン」などで。(田中)

◇図書館へ望むこと

知識を広げるのに一番近くで手助けしてくれるのは図書館ではないかと思っていますので、今の左京図書館が旧館より大きくなったことで、蔵書も増え、読書スペースも広がり、ゆっくり本と向きあえると大きな期待をかけていました。

ところが、相談窓口の司書さんは、貸出、返却でいつも忙しそう、読みたい本は貸出中、館内の本は捜しにくいと最近特に楽しめない日が多くあります。

入館者が増えたことでザワザワは仕方がないとしても、図書館の方向が無料の貸本屋状態で、いかに入館者に喜んでもらいたい、たのしんでもらいたい、という姿勢が感じられない、本を通じての触れ合いが感じられない。本好きな人にやさしい図書館作りをもう一度考えてもらえないでしょうか。(松本)

◇やっと身近になった図書館への期待

「なぜ私は図書館を利用してこなかったのだろう」と考えてみる。「そうだ。大人になるまで私の身のまわりに図書館がなかったからだ」なんと、左京に市の図書館ができたのが、今から26年前。そういう習慣がつくはずもなかった。幸い近くに新左京図書館ができ、遅まきながら、利用者となった。ふらっと行って色々な本に出会うのが楽しい。そして今では、何かわからないことがあれば、「図書館に行って調べよう！」というふうに、生活の中になくはならないものになってきた。

しかし残念なのは、私の好きな自然科学の分野の本が少ないことだ。借りたい本は、ごくわずかで、また足が遠のいてきた。リクエストをすればいいのだが、忙しく、まめでない私にはなかなかできない。図書館には専門の職員がおられ、情報も豊富で、何よりも確かな選本眼をお持ちだと思う。自然科学の分野の基本的な本揃えをしていただきたいと強く思っている。リクエストもしていきたいが、逆に、図書館でいい本を見つけて、自分で購入したい。そういう期待も図書館に持っている。

誰でも利用できる図書館に、各分野の基本的な本揃えがあれば、そこから世界が広がり、困った時の助けともなると思う。

やっと身近になった図書館に、感謝しつつ、おおいに期待を寄せている。(橋本)



◇書架に並ぶ本は本の森への入口

京都市の図書館がコンピューターネットワークで結ばれるようになって、「20館すべての蔵書のなかから本選びができるようになった」ということがいわれます。確かに読みたい本が具体的に書名までわかっている場合は、図書館の検索機を使って、あるいは家庭でインターネットの図書館のホームページで蔵書検索をしたりして、全蔵書の中から見つけ出すことができるでしょう。

しかし、私たちが図書館に足を運ぶのは、必ずしも読みたい本借りたい本が書名まで明確にわかっている場合ばかりではありません。「こんなこと知りたいんだけど…」「こんなテーマのおもしろい本ない？」そのような利用者の質問には、まだまだコンピューターはちゃんと答えてはくれません。

そこで、司書さんにお聞きするか自分で書架を巡って探すということになるのですが、左京図書館のような地域館なら、今のところ広さも600㎡余り蔵書も5万冊程度で全てが開架書架に並んでいるのですから、全部見て回ったところで大した時間はかかりません。書架のあいだを逍遥するのも図書館通いの大きな楽しみのひとつです。

そういった直接利用者が最も身近に目にすることができ本を手にとることができる、地域館のそれぞれの書架が、各館の利用者のニーズに配慮した魅力ある本揃えであってほしい。それでこそ、初めてその向う側にある他の館の蔵書も活かされてくるのではないかと感じています。そして、本探しのための本一参考図書が、司書さんの助言を得やすい位置に、もっとたくさん欲しいなと思います。

身近な図書館の司書さんと書架に並んでいる本たちが、私たち利用者の京都市全図書館の本の森への入口なのです。(永井)

◇調べる楽しさを支える レファレンスサービスを

私は科学読み物の読書会に参加しています。ドングリ、カメ、てこ、星の一生など、毎回テーマを決めて子ども向けの本を集め読み比べをします。中央図書館で団体貸出を利用していますが、読書会当日の発表をする当番になったとき、頼りにするのが、身近な地域館です。団体貸出で借りた本で足りない場合、蔵書検索で調べて、市内あちこちに散らばっている、そのテーマの本を予約して集めるのです。捜している本が左京図書館にあると、ほっとします。

というのも読書会活動では、準備に、当日に、また報告作成の参考に、と本が長期間必要で、個人で2週間借りる場合は、何度も返却、貸出を繰り返すからです。予約で間に合わない時は北、岩倉、山科図書館に直接借りに行くこともたびたびです。

このような手間がかかっても、何冊もの本を比べ読みして得られる、わかった！というよろこび、新たに気づいた疑問からひろがる興味はつきません。

一方、子どもたちはこの調べる楽しさを図書館で存分に

味わっているでしょうか。現状では誰か、図書館の使い方をよく知っている人の手助けがないと本探し、ことに他館の本を捜し集めることは難しいのではないのでしょうか。中学生でも、ざっと書棚を見ただけではなかなか思う資料にたどり着けないようです。

調べたいことが載っている資料に出会えたうれしさを経験しないと、子どもは、見つからへん、あらへん、できひん、とせっかかもった興味をなくしてしまうように思います。このような子どもに、そして大人にも手を貸してくれるレファレンスサービスが充実すれば、そして、他館から取り寄せなくとも、できるだけたくさんの資料がその場で揃うようになれば、と思います。図書館が、調べる楽しさ、そこから広がる興味を支えるよりよい場所になってほしいと願っています。(島崎)

◇中高生のための本棚を

左京図書館では「赤ちゃんにもやさしい図書館づくり」が進められ、赤ちゃん専用の書架もでき、赤ちゃん連れの来館者も増えています。

しかし、現在の図書館には中高生向けの書架いわゆるヤングアダルトコーナーがありません。中高生向けの本は、幼児と小学生向けの児童コーナーに並べられています。

ところが、成人コーナーにも、中高生が読んで面白い本、読んでほしいと思う本が混ざっています。中高生にとってこのような状況は、本選びがやりにくいだけでなく、図書館から足を遠ざけることになってはいないかと思っています。

多感で純粋な中高生時代にこそ、様々な世界の本に出会ってほしいと願いますし、そのために是非、中高生向けの図書の充実と、ヤングアダルトコーナーの設置を望みます。

新鮮で魅力的な品揃えのヤングアダルトコーナーがあり、ワクワクするような本選びができれば、中高生にも居心地のよい図書館になるのではないのでしょうか。(明石)



◇見えにくいニーズにも目を向けて

数ヶ月前、読む、書く、記憶するのが困難な子供達の悩みなどが書かれている本*の中で、「ディスレクシア」ということばを知りました。本人は決して怠けているのではないのに、学校ではなかなか理解されず、その結果子供も親も苦境に立たされるといったきびしい現実と、各機関の取り組みが書かれていました。

その本のあとがきで、著者は「確かにディスレクシアは専門性の高い難しい話かもしれませんが。それでも、家庭で、学校で、地域で、わたしたちにできることはまだまだたくさんあると思うのです」と語っています。私も全く同感です。

本の楽しさを知っている大人として、子供達に本の楽しさを伝えたいし、読むことに困難を感じて入口でとまどっ

*『怠けてなんかない! ディスレクシア—読む・書く・記憶するのが困難なLDの子どもたち』品川裕香著 岩崎書店 2003年

けやきの 本棚 17

わたしの
おすすめの本

く、生命の神秘の賜物であると
感じています。

(会員 U・川東)

むたまがわ

武玉川・とくとく清水

田辺聖子著
岩波書店 02年

田辺聖子さんが古川柳の中でお好きな『武玉川』を
読みとかれまます。江戸庶民の
日常生活を写した句らに微
苦笑し感嘆し、広がる世界を
楽しみ読み進んでいくうちに
「人生」への共感の思いが心
の内においてきます。著者曰
く、「むたま」には、人生の
美しい漿液がある」と。ご一
読あれ。
(H・Yさん・左京図書館)

宮崎アニメの暗号

青井汎著

新潮社(新潮選書) 04年
サツキとメイにそっくり
な姉妹が出てくる映画があ
る? シン神はゴヤの絵から?
「トトロ」や「もののけ姫」
に、ケルト神話や人間と文明
といった、広大な背景が隠さ
れていたなんて。

宮崎作品を見た後に感じる
「作者の本当の意図は?」と
いうひっかかりが、かなり解
消しました。著者の深い知
識、推理の展開を味わいな
ら、探偵気分楽しく読める
本です。

(けやきサポーター

・枚方市)

ている子供にはともに方法を模索していけたらいいと思います。

例えば「ハリーポッターシリーズ」で考えてみた場合、同級生と話題を共有したいと思いつつも、自身の力では読めないからといって疎外感を感じたり、読むことをあきらめてしまったりすることがあると思います。そんな時、録音図書を気軽に利用して、「ハリーポッター」を楽しむことができたなら…。さまざまな問題があることは承知していますが、録音図書の力を借りて本の世界に心を遊ばせる経験も、読書の一つの形として認められてほしいもので

す。

家の近くの図書館にこのような録音図書が豊富にあれば、選択肢が増えて本選びをする時間はより楽しいひとときになるでしょう。見えにくく、社会的にも認知されにくいことに目を向けサービスをしていく、このような積極的な図書館を望みます。

地域の図書館こそ、「教育」としてではなく、「読書の楽しみ」を体験し、生涯継続していく手助けをすることができるのではないのでしょうか。(北園)

もっと行きたくなる図書館のために—

これから図書館と共に考えていきたいこと

◆寄稿に共通の期待とニーズ

今回、8人のけやきメンバーの京都市図書館の主に蔵書コレクションについての声を紹介したが、それぞれの意見のバックには共通する図書館への大きな期待があるように思う。「図書館が一人ひとりの世界を豊かにしてくれる場所であってほしい」という利用者の願いに、蔵書コレクションも応えるものであってほしいのだ。

ありがたいことに、京都市図書館においても、利用者のリクエストは年々叶いやすくなっているようだ。新聞や雑誌の書評欄などでみつけた新刊書や話題の本は、しばらく待つことさえすれば読むことができるようになった。しかし、それらは利用者も既にその存在を知っている本である。年月を経ると顧みられなくなる本も、ある。

やはり図書館では、専門家によって選ばれた、市民の様々な知的欲求に応えてくれる力のある本たちに、出会いたい。「こんな本があったんだ!」という驚きと出会いの喜び、そんな心地よい刺激を求めて私たちは本の森を彷徨う。

◆図書館の収集方針とは

ところで、図書館が資料を選択収集する際の基本姿勢には、二つの考え方があると聞く。

「本そのものが本来的に持っている本質的(絶対的)価値に重点を置くのか」あるいは「利用者の要求の強さの度合いに伴ってもたらされる付随的(相対的)価値に重点を置くのか」。

どちらの立場に比重を置くのかは、専門図書館か

公共図書館かによっても違うであろうし、同じ公共図書館でも中央館と地域館では違いが出るだろう。

京都市の図書館ではどのような方針で収集されているのであろうか。各図書館の利用者の要求(京都市民や各地域住民の図書館に対する潜在的ニーズ)をどのようなものと捕らえ、それはどんなかたちで図書館の設置目的や収集方針に反映されているのであろうか。このへんの捕らえ所の無さが、今、京都市の図書館が発する磁力の弱さの一因ではあるまいか。

◆京都市の図書館の収集方針を知ることから

けやき主催の岩崎れいさんの講演会でも紹介された『図書館の自由に関する宣言』(日本図書館協会1979年総会決議)の本文第1章-3に次のような項がある。

図書館は、成文化された収集方針を公開して、広く社会からの批判と協力を得るようにつとめる。

資料の収集方針が利用者に公開そして周知されれば、利用者もさらに建設的な立場で、資料の選択について図書館に提案することができるのではないだろうか。(永井)



REPORT

今、市民が願う図書館とは—

けやき学習会の講演

岩崎れいさんを迎えて

2004年6月14日 於：3階大会議室

図書館情報学の研究者でけやき会員でもある岩崎れいさんを講師に迎え、「私たち市民は図書館がどのようなものであって欲しいのか」をテーマに22人の参加で学習会を開催しました。「けやき」の活動も5年をすぎた今、これからの活動を進めていく上で基本となる知識をたくさん得ることができ、中味の濃い学習会になりました。

まず、図書館は誰でもが公平に利用できるサービス機関であり「いつでも私たちの心を豊かにし、私たちの知る権利を守る」役割を果たす、ということ、『図書館の自由に関する宣言』（日本図書館協会）などの資料とともに紹介。また公共図書館には、貧富の差で起こる情報格差を解消する役目があり、人々のニーズに応え、さらに図書館員がニーズを掘り起こすことで、すべての人に対する平等を期することができるということです。

次に図書館には、一般利用者の他に、子ども、障害者など特別なサービスの必要な人が来館しますが、この「特別な」サービスは一般のサービスにプラスして提供されるものではなく、一般のサービスの不足部分と考え、ここを埋めるものとして提供されるべきと話されました。例えば文字がまだ読めない乳幼児には読み聞かせやストーリーテリングなどのサービスが必要であり、視覚障害を持つ利用者には、点字や朗読のサービスが欠かせない。このようなサービスがあって初めて、ハンディがない利用者と同じくらいのサービスを受けていることになる、ということです。

利用目的別のサービスとしては、貸出・閲覧サービスの他に、情報サービス（レファレンスサービスなど）や集会サービス（映画会、お話し会、読書会など）も図書館の使命としてあるとのこと。また蔵書につい

ては、豊富なコレクションがあり、すぐ借りられる、ということが大切で、図書館に人が出向いた時に、読みたい、借りたいと思う本が揃っているべき。その上で、より専門的な本を他の館と分担収集・相互貸借することが理想である、ということで、例に東京都文京区の分担収集を紹介されました。

また図書館の利用については、児童サービスを例に、読書、学習の他、個人で感じた疑問を解決するための情報利用もある。そのためには、図書館利用や情報検索に慣れていない子どもに、特に図書館員の手助けが必要で、どのように調べるのか、どこへ行ったら資料があるのか、別の施設なら、行き方、尋ね方も教えるといった、行き届いたサービスが大切。ヤングアダルトについては、特に、きめ細かなサービスと資料の豊富さによって、搜しているものが迅速にみつかる、という経験が図書館の継続利用につながるという話が印象的でした。

さらに「行きたくなる図書館の土台になるもの」として、①住民の参加 ②プロとしての司書養成 ③魅力的な施設 ④出版界との連携を提示されました。住民の参加では、コレクションへの住民の要望に対して、司書はプロとしてより利用者を満足させることのできるコレクションを用意すると、コレクション内容が向上していくとのこと。

また、出版界との連携については、アメリカでは出版社が図書館に出版前の本のサンプルを配ってその反響をきいて発行部数を決めている例があり、やり方によっては図書館が出版界に影響力をもち、また連携してお互いが発展できる可能性を知ることが出来ました。（日本では出版市場における図書館のシェアは非常に少ないので、日本の出版界は図書館のことを考えに入れていないそうです。）

図書館のサービスは人、施設、コレクションが支えるもの、そして、「行きたくなる図書館」のためには住民が声をあげ続けていくことが大切というお話しに、「けやき」としてもその意を強くしました。これからも図書館と共に、みなで考えて行きたいと願います。

参加者の感想から— けやき会員の他、図書館に関心のある京滋の方々がありました

- ・図書館についてまとまった話を聞くのは初めてなので、図書館に関わるきっかけのヒントをいただきました。
- ・「図書館というものは一体何なのか？」という事が少しわかった様に思います。
- ・よい勉強になりました。よい刺激をいただき、今後も図書館と仲良くするチャンスにしたいと思います。
- ・何げなく利用している図書館についての定義や意義を理論的に聴いたのはじめてで、大変勉強になりました。現

实的には問題点が多く、理想的な図書館は難しいと思うが、図書館とは個・地域・行政の協力がなければ…文化レベルの高い地域にならなければならないと思う。子供を育てるためには大切な施設である。

・図書館の基本的な考え方がとてもよくわかり、これからの活動に生かしていきたいと思います。先生が言われた「住民参加」が大事という言葉をもみなに伝えようと思います。

この春に新築になった京都ライトハウス（千本北大路下ル）に8月2日、けやきから9名が見学に行きました。工事中、仮移転先が高野にあった縁で、昨年けやきで京都ライトハウス点字図書館を尋ねたのですが、この見学で、視覚障害の方と図書館のあり方を考えるきっかけとなりました（けやき14号）。

今回は新しい情報ステーションで、館長の加藤俊和さんからお話を伺いました。全国に30万人いる視覚障害者のうち点字の識字者は3万人程度であり、つまり点訳本や点字案内があっても読めるのは1割の人だけで、後の9割の人は、音声や人の介助が無ければ「情報」から取り残される可能性があることです。ここではお話のなかから、活字情報を音声に変える機器が様々開発されていること、京都ライトハウスが全国に先駆けてスタートさせた”読み書き相談サービス”について紹介します。

視覚障害の方への図書館サービスのみならず、一般利用者へ図書館サービスのあり方や将来の可能性についても考えるヒントになりそうです。

活字情報を誰もが利用しやすくなる予感—

「見えにくい人に役立つ道具」と「情報提供方法」はこんなに発達しています

高野に仮住まいされていたライトハウスが明るくオープンな雰囲気になりました。ここにある情報ステーションではその名の通り、点字図書館の貸出サービスだけでなく、日常生活情報を含む、あらゆる視覚障害者向け情報の提供基地としての活動をされています。コミュニケーションを大切にされた、スタッフの温かな対応には感動しました。

けやき14号でもお伝えしましたが、視覚障害者全体のうち、糖尿病を含む病氣や事故などにより中途失明される方が占める割合が、とても大きくなってきていること。また、拡大器があれば活字情報を利用できる弱視の方へのサービスが今まで充分でなかったことが、ライトハウスで問題になっています。

この情報化社会で、視力の低下により情報を得る機会を奪われることは、私たち晴眼者には想像できないご不自由なことと思います。点字図書・情報は視覚障害者にとって、情報の保存・伝達という意味でも、一つの文化としても、とても大切なものです。一方、音声情報は情報の取り出し易さ、速さ、という点で、とりわけ中途失明の方には、使い易いものです。パソコンの登場で、この音声情報がさらに利用しやすくなったと、館長さんからお聞きし、その実態を知るために、後日、ライトハウスで催された「見えにくい人に役立つ道具と情報フェスタ」に出かけました。

会場には「見えにくい人」だけでなくその方をサポートする方々も多く参加されていました。たくさんのパソコン、それに関連する機器や装置が会場をうめつくし、あまりのにぎわいに圧倒されました。同時に、視覚障害者が情報を渴望されている、その想いに、ショックすら受けました。

- ・会場で見かけた機器の一部を紹介しましょう。
 - ・活字情報（一般図書を含む）を点字と墨字に同時に印刷するプリンター。
 - ・活字情報をスキャナーで取り込み、それを拡大表示し、同時に音声で読み上げるソフト。
 - ・活字情報800字を約2cm角のSPコードにコード化するソフト。
 - ・そのコードを音声化する小さな装置（スピーチオといひます）。
 - ・個人の視力に自動的にピントを合わせ、活字を拡大してくれるメガネや装置。（これは私も欲しい！）
- これらの機器を使えば、視覚障害者と晴眼者が紙を媒体とする活字情報から同じ情報を得ることができるのです。

ところで、ライトハウスには視覚障害者のための点字毎日新聞*のほか、市民しんぶん、府会だより、府民だより、の各拡大版が置かれています。（残念ながら、これらは京都市の図書館にまだ置かれていません。）市民しんぶん拡大版の各ページの右下に、先程のSPコードがすでについているのをご存知でしたか？

このSPコードをスピーチオにセットすると拡大版の内容が音声で流れてきます。今後、このSPコードのついた活字情報はさらに増えていくと思います。そして、さらに改良された使い易い装置の出現で、晴眼者と視覚障害者の情報格差が小さくなっていくのではと、とてもうれしい予感がします。

活字情報が利用しづらいということが、見えにくい人、視覚に障害のある人にとって公共図書館を利用しにくい大きな理由の一つだったと思います。しかし、この情報フェスタに参加して、情報機器の発達で、その問題が解決する日は遠くないのではないかと、そうあって欲しいと強く感じました。（吉政）

*毎日新聞は点字によるダイジェスト新聞とその活字版を刊行している。



読み書き相談サービスから広がる可能性—
誰かに相談できるっていいな



今回初めて“けやき”の皆さんと共に京都ライトハウス情報ステーションを見学させてもらい、私が最も強い印象を受けたのは、“読み書き相談サービス”です。

“読み書き相談サービス”とはどんなものでしょうか。京都ライトハウスの窓口でもある情報ステーションには、利用者からの様々な問い合わせがあり、その内容は多岐にわたっています。そのため、それぞれの問い合わせに対し、スタッフはまず、その利用者の希望を的確につかむ必要があります。その上で、その希望に対し、部署や形式といったことにとらわれず、柔軟かつ誠実にサービスを提供します。

利用者の希望に応えようとするこうした姿勢そのものから生み出されつつあるサービス、それが“読み書き相談サービス”の特徴です。

具体的には、たとえば電話でこんな問い合わせがあったそうです。「ラジオで今日、阪神タイガース勝ったみたいやけど、新聞には何て書いてあるの？」こうした場合、情報ステーションの窓口には京都新聞が常備されていて、すぐに該当の箇所を電話口で読み上げて下さるといことです。

こんな電話がジャンジャン来るようになったら大変だろうと思うけれど、機会を逃さず臨機応変に対応がなされることによって、よりよいコミュニケーションにつながっていくという印象を受けました。

また、こんな問い合わせもあると聞きました。「自分宛ての文書の内容を、家族の代わりに読んで聞かせて欲しい。また、その返事を書くのを手伝って欲しい」

家族が本当に身近な存在であることが、時には負担になる。これは誰もが身に覚えのあることだと思います。そんなとき、気軽に、親身に相談にのってくれる第三者や、機関のあることは、それだけでありがたいですよね。

「自分のことは自分で」という努力は大切だし、実際に他人に頼らずにやり遂げられたら嬉しい。けれど、「誰かに相談出来る」「客観的にアドバイスしてくれる場所がある」ことで、自助努力もより豊かなものになるのではないのでしょうか。

のようになるのではないのでしょうか。

「小説の点訳本を送ってほしい」という問い合わせがあった時のこと。よく話を聞いてみるとまだ点字が読めないらしい。そしてさらにやり取りしていきうち、「点字の学習をしたい」というのが直接の希望だと分かったのです。そこで、点字学習のサポートサービスもあると伝えたとこ、その方は喜んでそれを利用されたそうです。

もし、こうしたやり取りもなく、一見「スムーズに」小説が送付され、いきなり小説にチャレンジすることになっていたら、本来の目的であった点字の学習に挫折する可能性は結構高かったかも知れません。

また、「どんなものがあるのか分からないので何を読んだらいいか教えてほしい」といった相談も、結構あるそうです。

私は、ライトハウスの“読み書き相談サービス”と、例えばやかまし村のような文庫活動で交わされているやり取りとが、ちょっと似ているな、と思ったのですが、それは、このように漠然とした“相談”もあらかじめ想定され、積極的に取り組まれているという点が共通しているからかも知れません。そして、図書館のサービスや書棚展開においても、こうした点で何か新しい可能性が、まだまだ潜んでいる様な気がするのです。

公共サービスに限ったことではないのですが、“誰かに相談できる”っていいな、と思います。信頼関係の構築や、「プライバシー」の問題など、避けては避れない葛藤や課題があるにしても。

いや、もしかすると、そういう葛藤があるからこそ、家族でも知人でも、いや必要なら今日出会ったばかりの人だっていい、自分以外の誰かに“相談”できるということが、人として生きていく上で欠くことのできない喜びのひとつと成りうるのではないのでしょうか。

(大隅)

けやきの活動 04年6月～04年10月

6/4 ニュースレターNo.16印刷

6/10～ 総会準備

6/15 第5回定期総会
学習会

(今、市民が願う図書館とは)
講師-岩崎れいさん

8/1 図書館主催“てづくり絵本を
つくろう”に協力

8/2 京都ライトハウス
情報ステーション見学

9/上旬～ ニュースレターNo.17編集

10/18 ニュースレターNo.17印刷発送

* * * * *

6/26. 7/24. 8/28. 9/25 (第4土曜)
図書館おたのしみ会に協力

6/7. 7/5. 9/6. 10/4 (第1月曜)

事務局会議
図書館とのミーティング

6/13. 7/8. 9/9. 10/14 (第2木曜)
絵本学習会

「あかちゃんに絵本を」ボランテ
ィア会議

6/3. 10. 17. 24 7/1. 8. 15. 22. 29

8/5. 12. 19. 26 9/2. 9. 16. 23. 30

10/7. 14 (毎週木曜10:30～12:00)

絵本コーナーで「あかちゃんに絵
本を」ボランティア

■ 図書館友の会「けやき」の仲間になりませんか ■

知りたい、調べたい、本の世界を楽しみたい

そんな私たちの望みをかなえ、

一人一人の世界を豊かにしてくれる場所。
それが私たちの願う図書館です。

左京図書館が今後もこのような市民みんなの図書館としていきいきとあり続けるために、私たち市民利用者は何ができるのか考え、活動したいと「けやき」を作りました。図書館のスタッフとともに、左京図書館を支え、育てていきたいのです。

こんな活動をしています 一緒にしましょう

子どもたちに絵本を読んだり、人形劇やおはなしも。

赤ちゃんの本選びのお手伝いや絵本についての相談も。

映画上映会など左京図書館の催しに協力したり、

「けやき」のテープ録音や、絵本コーナーの壁面を飾る作品を作ったり。

図書館の現状を調べたり、提案も。 ニュースレター「けやき」を発行。

ぜひあなたの思いを形にして

図書館友の会「けやき」の仲間になってください。

◆入会希望の方は、年会費500円をそえ下記事務局または郵便振込口座にお申し込みください。

事務局 京都市左京区高野東開町1-23 26-101 永井方

TEL/FAX 075-721-2625

郵便振込口座 口座番号 00920-8-156914番

口座名称 図書館友の会 けやき

年会費はニュースレターの印刷および郵送費の一部に充当します。

◆活動費のカンパも歓迎します。直接または上記の振込口座をご利用ください。

第4回 おとなのための 語りを楽しむ会



10月30日(土) 10時30分~12時

左京図書館 3階会議室

(左京合同福祉センター)

日本やアジア・アフリカ・グリムの昔話や創作のおはなしを、京都おはなしを語る会のメンバーが語ります。前回から土曜日に開いています。子どもの参加もOKです。

けやき情報板

絵本の学習会に参加しませんか

「あかちゃんに絵本を」ボランティアの活動が始まったのを機に4月から始まり、毎月第二木曜日1:30~図書館の上の会議室で開いています。絵本を互いに読みあい感想やこれまでの経験などを語り合うことで新たな発見も多々あり、盛り上がっています。今回は11月11日、テーマは「松谷みよ子さん作の赤ちゃん絵本(Ⅱ)」です。興味のある方は事務局まで。

右京中央図書館を考える会

が立ち上がりました

現右京図書館の利用者の方たちが中心となり、2007年度オープン予定の右京中央図書館を考える会が発足しました。今後毎月1回程度集まり利用者の声を集約して図書館に届ける予定とのこと。今回は(11月4日10時~、ハートピアボランティアルームで、施設・設備面について)

読者の声を!

ニュースレター「けやき」へのご意見ご感想をお寄せください。投稿もお待ちしております。(なお掲載についてはけやき編集部のおまかせください。)

編集後記

▽暑かった夏の一晩、けやき事務局メンバーで一皿を持ち寄り、夜が更けにぎやかなひととき。夜が更けるにつれ、ボランティア活動への意見が飛び交いました。各々の経験と情報と意見も持ち寄った宴は楽しく熱く「丑三つ時」まで続いたとか。 (き)

▽この夏お盆の直前に、左京図書館の映画上映会について京都新聞から取材を受けました。質問に答えて、映画上映会が始まった経緯や、現在休止中であるが多くの利用者が再開を切望していることなどを話しました。八月一六日の朝刊に記事が掲載されましたが、見出しや本文中に、(代用)で絵本コーナーもとか(上映会に代わる利用者拡大の試みとして「赤ちゃん絵本コーナー」を設置。市民グループ「図書館友の会」や「けやき」の協力で、毎週木曜午前、赤ちゃんらに絵本を読む活動を始めた。~とあり、大変驚きました。

「赤ちゃん絵本コーナー」の設置やボランティアが赤ちゃんに絵本を読む活動は、映画上映会の中断とは関係なく、ニュースレター一五号でも詳報した通り、保健所での絵本ふれあい事業の開始を受け、左京図書館が赤ちゃんとその保護者の利用を積極的にサポートするために、ボランティアも加わり始めたのです。せつかくの試みが映画上映会の「代用」とは

とところで同記事は、著作権問題をクリヤーし映画上映会を再開する方法として、インターネットでの映像資料配信や市視聴覚センターの映像資料の利用を紹介していました。そうか、これなら費用もかからず今すぐにもできるやん、映画上映会再開の日近し! 楽しみにしています。(り)

◇けやき 第17号 2004年10月18日

◇制作 図書館友の会 けやき ニュースレター編集部

題字 高野のYさん タイトルバック 岩倉のSさん

カット 高野のHさん

◇発行 図書館友の会 けやき

京都市左京区高野東開町1-23-26-101永井方

TEL/FAX 075-721-2625